MAINICHI (\*\*)

# インターネットと連動した 【滋賀生活情報紙】

この情報紙は「滋賀ガイド」と提携しています 智力子片 www.gaido.jp

vol.544・12月18日号 毎週木曜発行 4面に プレゼント情報!

- ●Oh!Me編集室/株式会社ヤマプラ:近江八幡市桜宮町294 TEL0748-34-8872 FAX0748-34-8927
- ●広告/滋賀毎日広告社:大津市打出浜3-16 TEL077-522-2603 発行部数:100,000部

●発行/毎日新聞大阪本社開発宣伝部:大阪市北区梅田3-4-5

よろいやかぶとといった日本の伝統 的な甲冑を着てお祭りに参加した り、史跡巡りをする人たちがいる。 長浜市の甲冑工房「時代物工房」 助朋月」の女将・塚本裕枝さんは、自 らも甲冑を着て祭りや武者行列を楽 しむかたわら、甲冑好きの人たちの ためのサイトを運営し、甲冑作りの お手伝いや交流に努めている。

# 自分の甲冑が欲しい

塚本さんは奈良県出身。東大寺大仏殿 や春日大社など、歴史と文化に彩られた まちで育ち、歴史好きになった。

本を読んだり、各地を散策し

たりするうちに、「歴史 は進行形で、教科書や 年表に書かれているこ とだけが全てではない」 と考えるようになった。 塚本さんの興味は、土地 や建物だけでなく、着物 や民族衣装にも及んだ。 「十二単を着てみたい!」

子どものころからそう考 えていた塚本さん。大 人になってから京都で 着用体験ができること

を知り、すぐに足を運んだ。

塚本さんの次の興味は、十二単と同様 に興味があった甲冑へと移っていった。

# 「甲冑って、どうやって着るのだろう? 私 が着たら格好良いかな?」

そんなとき、甲冑を着て楽しむサークル 「甲援隊」を知り、さっそく参加した。

メンバーの中には、自分の甲冑を持って

いる人も多かった。塚 本さん自身も自分の甲 冑が欲しいと思いはじ めたころ、同じサークル のメンバーで、後に夫と なる崩和さんと出会っ た。朋和さんは塚本さ んのために、軽い樹脂 製の甲冑を3カ月も掛 けて作ってくれた。

自分だけの甲冑を手に 入れた塚本さんは、甲 援隊の活動に精力的に 参加した。近畿各地に 出向き、祭りやイベント

> を盛り上げるのはとても面白 く、充実したものだった。

> 朋和さんが作ってくれた甲冑 は今も現役で、お気に入りの -領だという。



6年前に結婚したのを きっかけに長浜に 移住。その後3年

間は、ホテルで宴会やブライ ダルのプランナーの仕事をし

た。しかし、甲

冑作りが忙しくなる朋 和さんを見ているうち に、夫婦で同じ目標に 向かおうと思い、仕事 を辞めた。

「日本一の甲冑屋の女 将として天下を取る!」

現在は、ブログやフェイ

スブックで歴史好きの人と交流したり、 自分や仲間が甲冑を着て楽しんでいる 様子をインターネットで発信したりして、 甲冑や歴史に興味がある人たちとの「ご 縁」を深める毎日だ。

「着て楽しんでもらえる甲冑作り」には、 客に対する細やかな配慮が欠かせない。 塚本さんは、客の要望をいかにくみ取 り、満足してもらえるかを考え、それを作 り手である朋和さんに正確に伝える。

「『井伊家の赤備え』のような朱塗りの甲 胃にしてほしい」など、細部にわたる注

文も多いという。

塚本さんの丁寧な 接客と、朋和さん の細かな仕事に よって、客の体型 に合った世界で たった一つの甲冑 が出来上がる。

# 劇団から製作依頼も

最近は、劇団からの依頼もあるという。 塚本さんらが作った甲冑を役者が格好良 く着こなし、素晴らしいお芝居を演じてい る姿を見ると、自分も舞台作りの一助に なっているような気持ちになるという。

「子どものころから大好きだった歴史に関 係する仕事ができ、新たな出会いもあっ て楽しいです。滋賀は戦国の歴史が身 近にある地。小説や年表だけでなく、甲 冑を着て歴史を体験するのは面白いで すよ。甲冑を着ることが一時のブームで なく、趣味として根付いてほしいですね」

(取材・鋒山)

# 一助朋月 時代物工房

●長浜市元浜町19-2 ●0749-50-4063 ホームページ http://itisuke-ko-bo.net











買取&お預りシステム

**☎**077-**547-2606** 定休日 日曜日

営業時間 10:00~19:00

